

氏名	中村宏太
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第289号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉炸裂シリーズ 〈論文〉潔さの観点から捉えたグリッド・ミニマル・環境の三つの総合性の復興に向けて
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 保科豊巳
（論文第1副査）	〃 准教授（〃） 布施英利
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 坂口寛敏
（副査）	〃 准教授（〃） 中村政人
（〃）	〃 教授（〃） たほりつこ

（論文内容の要旨）

本論文では、グリッドからミニマルそして環境へと続く一連の流れ、およびそれを現代的に再構築する私の作品について、「潔さ」という観点から述べる。私は、歴史のなかで豪華絢爛への移行と簡素への復帰が繰り返されていると思う。私は、ミニマルの復興を目指す、単なる復興ではなく、日本人としての私の特性を加味し、身体的、接触や移動を意識したミニマルを再興したいと考える。

第一章 私の原体験からの展開

私の作品の背景として、その基礎をなす体験が二つ存在すると思われる。第一は、1991年から2003年まで外国に居住したという経験である。その間私は比較的多数の実際の作品に接することができ、幾つかの作品から強い衝撃を受けた。その衝撃を受けた作品は、いずれも歴史的なひとつの流れの中に存在していた。すなわちグリッド、ミニマル、環境の流れである。その作品には「潔い」という共通の特徴があった。

第二の体験は、私がニューヨークにおいて、ワールド・トレード・センタービルの崩壊を身近に見たことである。その出来事は、私の信じる物理的、精神的緊張感の極限を、いとも簡単に解き放った。瞬間に散る、その散りざまが、ある意味で美しく「潔い」。直後の喧噪の中で、私は、私の中に存在する普段意識していない無駄を省いた純粋無垢の生存への力を感じた。

第二章 モダニズムにおける「グリッド」の存在

グリッド（キューブを含む）とは四角形の格子状の形である。このグリッドは、近代建築から切り離されない単位である。作りやすく、使いやすく、保管しやすい。私たちは効率的な工業製品・建築の基礎の形、構造的強さをもつグリッドに囲まれている。正四角形のグリッドとは、人間が行きついた、最小限の建築素材で最大限の面積を保つ形である。最後のモダニストと評される谷口吉生やミースの作品には、余計な要素をすべてそぎ落とし、生活の品位を高め、浄化させる、というミニマリズム的な本質的な建築への絶え間ない探究が含まれる。

第三章 「ミニマル」とその影響

ソル・ルウィット、カール・アンドレ、ドナルド・ジャッドらは、グリッドの影響を受けてミニマルアートに発展する。ミニマルとはシンプルであると同時に、物や事の本質であるということ、フィクションではない実際であることにほかならない。ミニマルアートでは、「形体」や「物質」の側面の「極限化」、すなわち形態上の「極限化」を体現している。主張しすぎないで場と調和し、中性的である。安定感を感じさせる形、水平と重力、リアリティや、時にむき出しの粗さを感じさせられる。ミニマルは、西洋では最終形であるが、東洋では始まりの予感を感じさせると、李禹煥は述べている。簡素なもの、構造が単純化された物には、すがすがしく一生懸命に生きるという要素が宿る。

第四章 「環境アート」について

立体のミニマル作品は初期の環境アートに発展していった。ロバート・スミッソンやウォルター・デ・マリアの作品は、極限的に形を迫り及ぼしてそぎ落とした明確な形であり、その巨大さがそれを強いたものではない。

一方、環境アートを論じる際に、日本人である私が重要だと思うのは、日本の古くからの茶室および茶室庭園の存在である。環境アートは茶室のような限界まで切り詰められた最小の世界で無限の宇宙を内包する、侍庵と共通した世界観を感じる。

環境アートは水・光・土・自然と調和する作品である。作品は刻々と変化し、私たちの心をゆさぶる。なぜならば私たちの心も、つねに変化し続けるからである。その出会いの一瞬は大切に、未練がなく、すがすがしく、潔い。

第五章 共通要素としての「潔さ」について

上記のグリッド、ミニマル、環境の流れの作品すべてには、日本語で「潔い」と表現されるにふさわしい共通の特徴が感じられた。「潔い」には、勇ましい、潔白である、未練がない、思い切りがいいなどという意味がある。潔いという言葉は「イザ」という掛け声と「清い」が結びついたものらしい。「潔さ」は、人間の本質である限界の中での生存への極限化された形を求めている。私は、その「潔さ」により、混沌の世の中に生きる人の心を自由にできたらと、ささやかながら思う。

第六章 モダニズムの復興と私の作品

私は、潔さの要素を含む簡素さの復興を試み、作品の《炸裂》において、あっさりとした瞬間の行為の実現としての銃に着目した。作品では、弾丸によって、真鍮板の中における緊張する分子と分子の結合を瞬時にして断ち切る。この断ち切ることは現世からの解脱を意味する。

結 論

私はあえて同じ手法をとりつつ、60年代のムーブメントであったミニマルを今日に復興させようと試みる。しかし、むろん単純な過去の引用や反復ではなく、そこに日本人である私自身が投影されなければならない。その際、私が着目するのは京都の禅寺や庭に通ずる精神性である。成川武夫によれば「大乘仏教のぜんたいを通して『現在実有・過未無体』という自覚的な時間意識がある。(中略)死の切迫を意識することによって、この時間意識が破られたとき、過去はもはや存在せず、未来はいまだ存在しない。ただ刻々に生滅変化する目前の事象のみが真に存在するという、仏教の自覚的な時間意識が発現するのだと思う。」瞬間に生きる形をなす意味で潔い。これはただミニマルな美しさを求めるのではない。生存という目的に向かって一生懸命に生きる姿が潔く、その姿が結果ミニマルとなり、美となり、私に感動を与える。その感情が鑑賞者にも伝わることを信じて私は制作に取り組み、そして生きている。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、21世紀の現代において新しい美の創造を模索する筆者が、20世紀美術で探究されたミニマル・アートなどの美学を、現代に甦らせ作品化することは可能か、という問題に、実践的な制作を交えながら取り組んだ論考である。

「歴史のなかで豪華絢爛への移行と、簡素への復帰が繰り返されている」。

まず筆者は、そう述べる。ミニマル・アートは、ここで述べている「簡素」の代表であり、その後続くポスト・モダンの芸術は、「豪華絢爛」に通じるものであった。この二つの対比のなかで、筆者は「簡素」の美を愛し、それを自身の作品として結実しようとする。そこで出てきたキーワードが「グリッド・ミニマル・環境」である。本論文は、この三つをいわばストーリーの縦糸にし、そして「潔さ」という視点を横糸にして編み上げられた論考である。

第一章では、自分の海外での体験を述べ、そこで体得した「簡素」へと通じる美の世界を語るための足場をつくる。

第二章では、モダニズムにおける「グリッド」の存在について論じ、四角形の格子という具体的な「形態」を提示する。

第三章では、「ミニマル」なアートを論じ、ドナルド・ジャッド、李禹煥などの作品を検証する。ミニマル・アートは、グリッドのデザインの影響から発展したものと筆者は考えているが、それがさらには環境芸術に発展すると述べる。

第四章では、「環境アート」について、現代美術のいくつかの作品を例に挙げ、さらに京都の修学院離宮など日本の伝統的な美について論が展開していく。つまり筆者は、20世紀美術の中に、日本の美に通じるものを発見する。

そして第五章で「潔さ」という視点を導入し、これまでの論考を一つに貫く要素を提示する。さらに、その一つの「到達」として、筆者自身の作品を取り上げ、それがこの論文の主題である「グリッド・ミニマル・環境」と「潔さ」をつなぐ造形物としてあることを、いわばこの論文の結論とする。

筆者は、自身の作品のルーツである、欧米の美術や日本の古い美術をとりあげ、それらをつなぎ合わせていく。つまり作品制作の背後にある思索を、整理し、検証し、さらに磨き上げていく。このような論考は、大学院博士課程の研究として意味のあるものであり、また一人のアーティストの作品制作の背後にあるものを見せてくれる点でも価値のあるものである。いわば大学院での制作と思索の結晶として本論文はある。論文のテーマも論旨も明快であり、論文としてきちんとまとまってもいる。

よって本論文を、博士論文として合格とする。

(作品審査結果の要旨)

申請者は、瞬間に生きる形をなすものの姿について「生存という目的に向かって一生懸命に生きる姿が潔く、その姿が結果ミニマルとなり、美となり、私に感動を与える。その感動が鑑賞者にも伝わることを信じて制作に取り組み、そして生きる。」と言っている。

審査の作品「炸裂」シリーズは、申請者が2種類の物質を標的にして実弾射撃した被弾物体によるインスタレーションである。一つ目の物質は、弾丸が貫通した穴が空いた状態の、或いはまた貫通せず突き刺さっている状態の金メッキされた1.9ミリ真鍮板である。これらは計8作品から構成されており、展示空間を取り囲む様に目の高さで吊るされている。鑑賞者は鏡面仕上げのこれらの標的を注意深く観察しながら、不意に自分の姿が映し出されていることに気づかされる。弾丸が貫通した穴が空いた、或いは弾丸が突き刺さっている標的の鏡面に映る鑑賞者は、周りの環境とともに作品に取り込まれ、身体的にも、思想的にも被弾すると感じる。その時、照準と標的の関係は視点による点と点を結ぶ線上に関係

づけられ、狙撃者と被弾者が交換可能な両義性を持つことに気づかされる。二つ目の物質は、細かな散弾が貫通しきれず入り込んだまま留まっている状態の50ミリ厚立体樹脂シリコンである。この柔らかさのある透明立体が台座の上に設置され、あたかも宇宙空間で起こるとされる超新星爆発の様子等を想起させる作品となっている。

刻々と流れ変化する時間と空間に潜む身体性、物質性を通じ、社会と芸術の相関関係を考察、展開し、人間と時空間との関係性を具現化したこれらの作品は、修士課程、博士課程後期を通して一貫して取り組んできたテーマの集大成となるものである。

「潔さ」の観点から展開された本研究作品は、我々が失いかけていた瞬間に生きる存在の姿を露にする表現でありながら、普遍性を有するもので、芸術的創造の可能性を切り開くものとして審査員全員の高い評価を得た。今後の展開がおおいに期待される。

(総合審査結果の要旨)

作品「炸裂」シリーズは、極度な緊張感で迫る作品である、作者は日本の伝統的な建築「桂離宮」や「茶室」に見られるグリッドの空間と西欧近代の建築のグリッド構造のそれとの相克を、弾丸で打ち抜かれた行為の瞬間の時間と空間に閉じ込めたミニマルな緊張と弛緩の瞬間へと昇華させ、茶室に見られる行為の場としてのインスタレーション作品として創造した。

作者は美術史におこったミニマリズム運動を日本的な感覚体系の中でもう一度復興させる事を企て、自己の「銃で鉄板を撃つ」という生の感触の中で作品を結晶化させた、展示会場にインスタレーションされた作品は鑑賞者にその行為の場に立ち会うように強いていて、金メッキされた鉄板はそのもの持っている生々しい物質性が中性化され、弾丸の衝撃は時間の抜き去られた別の次元へと変換されている。またシリコンに打ち込まれた弾丸は強度な剛としての衝動を柔としてのシリコンが受けとめており作品は今までにない出会いを味わわせてくれている秀作である。

作品審査の過程において実作に立ち会わずに審査会が進行していた事で不明瞭であった評価が作品を目の前で触れた事で了解する感覚がおきた事は実物の作品がいかに身体的に重要な触発を持つかを知らされた審査会でもあった。

論文においては、その意外性と独自性は作者の作品制作の背景にある大胆な「潔さ」という論文でのテーマの言葉の設定にある。

「潔さ」という日本の生き方としての美的解釈、感覚のあり方で語られる言語を美術の文脈に持ち込み、ミニマリズム芸術の極度に単純化したグリッド構造や建築やデザインでの機能美の解釈を桂離宮や茶室の身体的環境芸術の中で読み替えている、現代芸術のミニマリズムを日本的な感覚体系の中でもう一度復興させる事を企てる論述は、日本のまだ見ぬ芸術の地平を開示すると共に現代に新しい芸術の解釈を迫るものであり、優れた創作者の背景を論述した論文であるとして審査員全員が作品、論文共に博士学位に相当するとし高く評価し合格とした。